

ジョン・ミューアのアラスカ紀行（1879）
-出発の契機と、科学と文学の融合-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学人文科学研究所 公開日: 2018-07-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柴崎, 文一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/19483

ジョン・ミューアのアラスカ紀行 (1879) :
出発の契機と、科学と文学の融合

柴 崎 文 一

Muir's first trip to Alaska and the fusion of science and literary imagination: A reading of Muir's *The Trip of 1879*

SHIBASAKI Fumikazu

John Muir traveled to Alaska seven times, with his adventures and thoughts on the Alaskan wilderness recorded in his posthumous work *Travels in Alaska*. Although well known, this book has not been studied with great precision. This paper focuses on his Alaska travels from two points of view. The first is descriptive and objective. The second focus is on identifying the type of thinking that underlies the writing of *Travels in Alaska*.

We know that Muir first landed on Alaska's Wrangell Island in July 1879, but we do not know why he decided to visit Alaska or how he traveled there. Linnie Marsh Wolfe suggests that it was a lecture by Sheldon Jackson at a Sunday-School Convention in the Yosemite Valley in June 1879 that spurred him to go. Jackson had talked at the Convention about his missionary activity in Alaska. But Wolfe's assumption is demonstrably mistaken, as a letter to Muir from his friend Mackey (dated June 2, 1879) shows that Muir had been planning to travel to the British Columbia area before his meeting with Jackson. Also, Muir writes in a letter to Mrs. Carr (dated June 19, 1879) that he "may visit Alaska." This means that his trip to Alaska had not yet been definitely decided at that time, yet. Muir's letter to his fiancée Louisa and her family (dated July 9, 1879) implies that his meeting with Lieutenant Calvin L. Hooper in Port Townsend should be considered as the original stimulus for his trip to Alaska.

In *Travels in Alaska* we can see Muir attempting to fuse literature, intuition and science. He opines that indigenous artifacts such as totem poles should be left in their original position; outsiders should not be allowed to collect them for any reason. The study of native American society and culture should be explored by means of what he calls "predication," a fusion of scientific description and subjective representation. This is a position that is closely related to his fundamental idea of the "preservation" of nature. According to Muir, human being should as much as possible avoid intervention in nature, and should strive let nature follow its own course.

Another fundamental term related to the protection of nature is that of "conservation," the idea that nature should be protected and maintained or stewarded for its sustainable use by human civilization. The idea of collecting indigenous artifacts and storing them in a museum for the benefit of future generations can be seen as a form of "conservation," but this is a concept that Muir opposes under any circumstances. He is firmly of the opinion that societies and indigenous cultures should be investigated by a combination of scientific observation and poetic intuition. The latter requires that these artifacts should be left in place.

〈個人研究第2種〉

ジョン・ミューアのアラスカ紀行 (1879) : 出発の契機と、科学と文学の融合

柴 崎 文 一

はじめに

ジョン・ミューア John Muir (1838-1914) は生涯に七度のアラスカ探検に出かけ、多くの新聞記事やエッセイを発表した。それらは彼の最晩年に整理され、出版が目指されたが、生前に脱稿までには至らなかった。実際に『アラスカの旅』 *Travels in Alaska* として出版されたのは、生前からミューアの原稿整理に手をかしていたマリオン・パーソンズ Marion Randall Parsons 夫人とウィリアム・ベーデ William F. Badè の編集をへて¹、彼の死の翌年のことだった。

パーソンズ夫人は、ヘッチ・ヘッチー溪谷をめぐる闘いで、ウィリアム・コルビー William E. Colby と共に常に最前線で奮闘したエドワード・パーソンズ Edward T. Parsons の妻であり、ミューアの長女ワンダ Wanda の友人でもあった。ミューアは1912年の11月頃からパーソンズ家に寄寓してアラスカ紀行の原稿をまとめ始める [Parsons 1916]。途中、ヘッチ・ヘッチー溪谷の問題で中断を余儀なくされたが、この闘争に敗れた後、彼は原稿の執筆を再開する。しかし1914年の12月、原稿は現在のものにかかなり近いところまで書き進められていたが [Badè 1915, L. 21]、完成までには至らず、彼の突然の死によって、未完のまま残されてしまったのだった [Wolfe 1945, 347]。

『アラスカの旅』に収録されている紀行文は、1879年、1880年、1890年の旅の記録であり、中でも一回目のアラスカ探検に関する章が全体の六割を占めている。生前に完成には至らなかったため、さらに加筆する予定があったのか、あるいは全体のバランスを考えて、第一章を縮小することになったのか、本書に関するミューアの最終的な意図は不明だが、ミューアにとって、一回目のアラスカ探検が特に印象的なものだったであろうことは想像に難くない。しかし、ミューアにアラスカ探検を決意させた経緯に関して、これまでのミューア研究では必ずしも明確にはされてこなかった。本稿は、1879年のアラスカ探検に関連した史料を精査することによって、ミューアがアラスカへと赴くことになった経緯を解明するとともに、『アラスカの旅』に見られる科学と文学の融合の試みを読み解こうとするものである。

1. 19世紀のアラスカ

ミューアが初めて訪ねた頃のアラスカは、1867年にロシアからアメリカに売却されてから10年ほどしかたっておらず、地形の詳細も明確ではない時代だった。

ロシアは1799年に「ロシア・アメリカ会社」を設立し、カムチャッカ半島からアラスカ地域にかけて毛皮事業と植民経営を行っていた〔森永貴子 2014, 2〕。当時、毛皮は重要な交易品の一つであり、ラッコの毛皮などは特に中国での需要が高かった〔森永貴子 2014, 28〕。しかしロシアと清朝中国の間には、両国の貿易商人に対する課税問題をめぐる対立や、モンゴル系先住民の帰属争いなどの外交問題があり〔森永貴子 2010, 57-63〕、ロシアは、イギリスやアメリカのように、清朝中国と自由貿易を活発に展開できる状況ではなかった。そのためロシアは、中国と自由に貿易を行っていたアメリカの「ボストン商船」を介して毛皮を売り、食料や中国茶を買うという形で、対中国貿易を行っていたのだ〔森永貴子 2008, 163-165〕。

ロシアによるアラスカ統治の基盤であった「ロシア・アメリカ会社」は設立以来、資金繰りの悪化や〔森永貴子 2008, 172-173〕、ヨーロッパの交易者を歓迎しなかったトリンギット族による反乱など〔森永貴子 2008, 149-155〕、幾つもの困難な状況を経験したが、1867年のアラスカ売却まで、業績はまずまずの状態を維持していた〔森永貴子 2008, 173〕。しかし1853年ロシアは、オスマン帝国と、ロシアの南下を阻止しようとしたフランス、イギリス、サルデーニャ王国との同盟軍を相手に「クリミア戦争」を始めると、戦況の悪化にともない、イギリス軍がロシア本土に接したアラスカへと侵攻してくることを警戒しなければならなくなった。しかし防衛するべきアラスカは、ロシアの中心からあまりにも遠く、広大に過ぎた〔Gibson 1983, 17〕。そこでロシアは、将来的にはイギリスに対抗しえる存在となることが予測され、クリミア戦争へは参戦していないアメリカにアラスカの売却を持ち掛け、アラスカをアメリカに渡すことによって、北東からのイギリスの侵攻を阻止するとともに〔Gibson 1983, 23〕、無価値なアラスカを売却することによって²、幾ばくなりとも財政の補助とすることを考えたのだった〔Gibson 1983, 22-23〕。

一方、アメリカにとってアラスカの購入は、極北及び極東方面への経済的勢力圏の拡大や、アラスカの取得に意欲を示していたと言われるイギリスに先んじるということからも、意味のあることだった〔Gibson 1983, 15-16〕。こうして両者の思惑は一致し、1867年3月30日ワシントンD. C. で、アラスカの売買に関する条約がロシアとアメリカの間で調印されたのだった。テキサスの2倍の広さを持つ広大な土地は、720万ドルという価格で売買された。それは、1エーカーあたり2セントという破格の安値だった〔Gibson 1983, 15〕。ただし、条約批准に関する下院での議論において、アラスカを「ジョンソン大統領の『シロクマ園』 polar bear garden」であるとか、「スワード議員³の『アイスボックス』 ice-box」に過ぎないなどとする批判が出されて代金の支払が遅れ、下院での可決は1868年7月27日まで待たなければならなかった〔Gibson 1983, 15〕。

その後アラスカでは、1898年にノーム Nome で大きな金鉱が発見され〔Chandonnet 2005, 70〕、20

世紀に入ってから石油や天然ガスも発見されて、アラスカは「シロクマ園」や「アイスボックス」どころか、現代では天然資源の宝庫とみなされている。しかしミューアが初めて訪れたころのアラスカでは、まだ大規模な天然資源は発見されておらず、一攫千金を夢見る金鉱探しが、時折アラスカの原野を彷徨するのみであった⁴。

ただし、アラスカ北西沖での捕鯨活動は盛んで、1881年のミューアにとって3度目のアラスカ旅行は、北方洋で行方不明となったアメリカの探査船と捕鯨船を捜索するためのものだった⁵。また、ロシア・アメリカ会社の時代から、毛皮の取引や先住民の反乱に備えて、各地に砦Fortが築かれており、ミューアがアラスカ探検の拠点としたフォート・ランゲルFort Wrangellも、アラスカ購入後にアメリカ軍によって築かれた砦が、その名前の由来だった。この砦は1868年に築かれ、1877年に放棄されたので[Wrangell Visitor Center 2017]、ミューアが1879年に初めてここを訪れた時には廃墟となっていた。その様子は『アラスカの旅』の中でも触れられている[Muir 1915, L. 201]。

2. ヨセミテの「日曜学校大会」

1879年に初めてのアラスカ探検に向かった時、ミューアはルイ・ストレンツェルLouisa Wanda Strentzel (1847-1905)と婚約したばかりだった。

この頃のミューアは、1868年に初めてヨセミテの自然と出会い、当時の「通説」に抗してヨセミテ渓谷が過去の氷河による浸食によって形成されたとする独自の説を唱えたことから始まり⁶、シエラネバダに残存する氷河の発見や[柴崎文一 2014, 199-201]、シエラネバダや西海岸の豊かな自然環境を伝えるエッセイを多くの雑誌に発表するなどして[Kimes 1986, 1-25]、広く社会にその存在が知られるところとなっていた。また私生活においても、カー夫妻の紹介でルイと出会い、ミューアは1879年6月17日にストレンツェル家で彼女に結婚を申し込んだのだった⁷。そして彼はこの三日後、初めてのアラスカ探検へと旅立った。

ミューアを乗せた蒸気船ダコタ号*Dakota*がサンフランシスコの港を出航したのは1879年6月20日だった[Grassick 2006, 20]⁸。『アラスカの旅』では「1879年の5月」に出航したと記されているが[Muir 1915, L. 46]、これは何かの間違いだろう。

ウルフLinnie Marsh Wolfeは、1879年の6月7日からヨセミテで行われた「日曜学校大会」Sunday-School Conventionで、シェルダン・ジャクソンSheldon Jackson (1834-1909)が行ったアラスカに関する講演に接したことが、ミューアにアラスカへの探検旅行を思い立たせた契機であるとしている[Wolfe 1945, 203]。しかし、はたして思い立ってから十日あまりの期間で、この後12月まで滞在することになるアラスカ探検の旅支度を整えることは可能だろうか。ウルフの説は、ミューアに関する多くの伝記研究で、言わば定説のように受け入れられており、その影響力は極めて大きい⁹。それ故、筆者は以下で、ヨセミテでの「日曜学校大会」からアラスカ探検に至るまでの経緯を詳しく検証してみることにはしたい。

ヨセミテで開催された「日曜学校大会」は、ショトーカー運動Chautauqua Movementの一環として

行われたものである。ショトカー運動は、ジョン・ビンセント John Vincent 牧師 (1832-1920) の提唱によって始まった成人教育運動であり、初めての集会在ニューヨーク州のショトカーで開催されたことから、この名称で呼ばれることになった [Wardle 1918, 125]。この運動は19世紀末のアメリカで、極めて多くの人々から愛され、セオドア・ルーズベルト大統領 Theodore Roosevelt はこの運動を評して、「アメリカで最もアメリカ的なものだ」と言ったと伝えられている [Snyder 1983, 15]。ショトカー運動では毎年夏に、講演会や音楽会で構成される大規模な「日曜学校大会」が開催されていた。ヨセミテでの大会も、こうした背景から、2年の準備期間を経て開催されたものであった [Vincent 1879, 197]。

この時の記録を見ると、参加者の多くは東部の関係者だったことが分かる。5月27日にシカゴで350人の参加者が集合し、9両編成の特別列車を仕立てて、一行はカリフォルニアに向けて出発している [Vincent 1879, 197]。途中、世話人として車両ごとに代表者が選ばれ、その中にはシャルダン・ジャクソンの名前も見られる [Vincent 1879, 197]。一行はソルトレイクをへて、6月4日の午後サクラメントに到着し、その後、幾つかのグループに分かれて馬車に乗り、6月6日にヨセミテ溪谷に到着している [Vincent 1879, 198]。途中マリボサで一行は、ジャイアント・セコイアの森などを見物している。

6月7日の晩は、ヨセミテに建てられたばかりのチャペルで、盛大に「前夜祭」が催され、翌6月8日から15日まで連日、多彩な講師陣による「日曜学校大会」が開催された。

6月8日の日曜日、安息日の礼拝と説教が行われた後、ジャクソンが「アステカ人」Aztecsと題する講演を行っている。彼は翌9日にも、「アラスカ」Alaskaと題して講演を行っており、この講演ではアラスカでの伝道活動が語られたとされている [Vincent 1879, 199]。ジャクソンによる講演は、記録から見る限り、この2回だけである。彼の講演について現在分かることは、以上のことのみで、講演の具体的な内容については知る手がかりがない。

ミュアの講演も、ハイキングやキャンプファイヤーの時になされた臨時のものを除くと、9日と10日に2回行われている。9日の講演は、「ヨセミテの地質学的記録」The Geological Records of Yosemiteと題して行われ、ミュアは独特のユーモアを交えて、ヨセミテ溪谷が、当時広く流布していたジョサイア・ホイットニー Josiah Dwight Whitney (1819-1896) の説く「落盤」subsidenceによるものではなく、過去の氷河の活動によって形成されたものであることを説いたと記されている。サンフランシスコのデイリー・イブニング・ブリテン紙 *Daily Evening Bulletin* は、6月13日付の記事で当日の様子を報じ、「彼の講演は熱狂的な好評を博した」と伝えている [Kimes 1986, 145]。また「日曜学校」の報告書でも、ミュアの話は、「きわめて魅力的な講演だった」と記されている [Vincent 1879, 199]

ミュアは翌日の10日にも、「山岳彫刻」Mountain Sculptureと題して講演を行っている。ブリテン紙はこの時の様子を6月14日付の記事で、「岩々の証言を愛情豊かに再現するミュアの講演は、サハラ砂漠の聴衆たちを魅了したことだろう。彼の詳細な研究成果によって構成された最上の舞台は、人々に無限の喜びを与えているかのようだった」と報じている [Kimes 1986, 145]。

大会3日目の6月11日は、グレイシャーポイント Glacier Pointへのハイキングにあてられた。ハイキングには200人以上が参加し [Kimes 1986, 145], 正午 high noonには [Vincent 1879, 199], 「巨樹」 Big Trees と題したミューアの野外講演が行われた。ミューアはさらにその晩、ヨセミテ渓谷の森の中で、参加者のために盛大なキャンプファイヤーの集いを催し、「セコイアの分布」 The Distribution of the Sequoia についても語っている [Kimes 1986, 145]。人々は、ヨセミテ渓谷の荘厳な森の中で、豪快なキャンプファイヤーの光に照らし出されたヨセミテ滝と、ミューアの「語り」にもてなされ、ヨセミテの夜を満喫したと、報告書は記している [Vincent 1879, 199]。

ヨセミテでの大会は、15日の日曜日まで開催され、15日に閉会した後、一行は、サンフランシスコの南200マイルに位置するモンテレー Monterey に移動している。ここで6月27日から7月4日まで、西海岸での2回目の大会が開催されて、この年の「日曜学校大会」は終了している [Vincent 1879, 200]。

なおブリティン紙は6月13日付の記事で、この一行に同行していたジョセフ・クック Joseph Cook (1838-1901) が¹⁰、当初はホイットニーの「激変説」を強く支持していたが、ミューアによる一連の講演を聞いて、ミューアの氷河説に「転向した」と報じている [Kimes 1986, 145]。クックは、ボストンを中心に講演活動をしていた思想家で、当時は全米でよく知られていた人物でもあったことから、ブリティン紙はその様子を特に伝えたものと思われる。

3. ジャクソンについてのミューアの人物評価

ヨセミテでの「日曜学校大会」の開催中、ミューアがヨセミテに滞在した正確な期間は不明である。しかし少なくともミューアは、6月9日に最初の講演を行ってから11日まで滞在したことは明らかである。一方でジャクソンも9日にアラスカでの伝道活動について講演しており、ミューアも同日に1回目の講演を行っている。このことからミューアがジャクソンの講演を聞き、二人がヨセミテで様々な話をしたであろうことは、想像に難くない。

ジャクソンは南西部の諸州で活躍した長老派 Presbyterian の指導的な宣教師であると同時に [Craddick 2013, 20 f.], アラスカでの伝道と原住民の「文明化」 civilization に大きな役割を果たした人物だった [Craddick 2013, 11]。ジャクソンはアラスカでの伝道活動を通して、多くの学校を建設し、徹底した「英語教育」によって、先住民の文明化とキリスト教化を行ったとされている [Craddick 2013, 9]。先住民に対するこうした「文明化」教育の他にジャクソンは、先住民の民具や宗教的造形物の収集を熱心に行ったことでもよく知られている。ジャクソンのこうした収集は、南西部で布教活動を展開している時から行われていたもので、東部の人々に先住民の民俗的特性を効果的に説明するためであったとも、教会の支援者に対する返礼品として贈るためであったとも言われている [Carlton 2006, 1-2]。

彼の収集に関する評価は分かれているようである。単なる彼の個人的な興味や彼自身の宗教的活動に資するためであったのか、またはそのまま放置すれば、散逸してしまうかも知れない先住民の事物を保存して、彼らの子孫に伝えるためであったのか判然としないのである [Carlton 2006, 5]。あるい

はむしろ、彼の意識の中には、このどちらの目的も存在していたというのが事実かもしれない。しかし、人類全体にとっての貴重な遺産として保存するという、今日の民族学的目的意識が彼の中で確立していた、とまで言うことはできないだろう。ただし現在、彼の収集物は、彼の母校であるプリンストン大学博物館 Princeton University Art Museum と、アラスカのシトカ Sitka にあるシェルドン・ジャクソン博物館 Sheldon Jackson Museum に収蔵・展示され、結果的には、貴重な民族学的遺産として今日に伝えられている。

『アラスカの旅』でジャクソンの名前が出てくる箇所は二カ所ある。しかしそれらは、同一の文脈中に出てくるものなので、実質的には一カ所しかないのに等しい。ミュアを乗せた船は7月14日にランゲル島 Wrangell Island に到着し、その後すぐにバラノフ島 Baranof Island 西岸に位置するシトカに向かった後、7月20日に再びランゲル島に戻り、ミュアはここで船を下りている。この時一緒に下船した人々の中に、長老派教会 Presbyterian の宣教師たちがおり、その一人がジャクソンと思われる [Muir 1915, L. 201]。つまりミュアはジャクソンら一行と同じ船でアラスカを訪れたのだが、ヨセミテでの講演会以来の知り合いであるとか、アラスカへの船上で親しく接したなどの記述は、『アラスカの旅』には見られないのである。上陸の翌日、ランゲル島には宿が全くなかったため、宿営するための場所として、丘の上の古い堡塁跡をミュアが点検していると、偶然ジャクソンと会い、彼から、伝道所の隣で建築中の作業場なら「毛布を広げて休むくらいの場所は見つかるだろう」と言ってもらったという記述の部分が、『アラスカの旅』の中でジャクソンの名前が見られる唯一の箇所である [Muir 1915, L. 215]。

ただし明確に「ジャクソン」とは記されていないが、「博士」 doctor や「聖職者たち」 divines, 「宣教師たち」 missionaries¹¹ といった表現で、ジャクソンやジャクソン達を示唆していると思われる箇所は、『アラスカの旅』の他の箇所にも散見される。この中に、ジャクソンを含めた「聖職者たち」に対するミュアの人物評価が色濃く示されている箇所がある。ランゲル島にやって来た宣教師たちは、蒸気船キャッシャー *Cassiar* 号を借り上げ、沿岸を北上してチルキャット族 Chilcat が住む地域への視察を計画し、ミュアもこれに同乗することになった [Muir 1915, L. 577]。ところがこの蒸気船は、河川用のものだったため、復水器に海水を利用できないタイプのものだった。そのためこの船は航行中に、岸壁などから流れ出る淡水を補給しながら進まなければならなかったが、淡水を補給できる適当な場所がなかったため、仕方なく船は海水を利用したのだった。しかし蒸気の冷却に海水を使用すると、ボイラー用の水に海水が混入し、これを熱すると泡立ってしまうという問題があった。そしてシリンダーの近くで水が泡立つと、シリンダーの先端が吹き飛んでしまうという危険につながった。そのためキャッシャー号は、最小限の出力で進まなければならなかった。しかしそうになると、旅程は当初の予定以上に延びることになってしまう。そこで「聖職者たち」は「経済的な会議」 economical meeting を行い、次のような結論を下したのだった。

我々是一日60ドルでこの船を借り上げており、今回の視察は四日から五日の予定で計画されたものであった。しかしこのスピードで行ったら、一人当たりの旅費が、当初の予算より5ドルから

10ドル高くなってしまふことになる。従つて我々は明日、ランゲルに戻らなければならない、という意見が多数を占めたのだつた。あたかも〔まだ見ぬ大自然の〕山々や伝道〔という使命〕が、差引残高〔という経済的視点〕において塵と化したかのように、追加支出〔しなければならないということ〕が、山々や伝道〔の使命〕を凌駕してしまつたのである。〔Muir 1915, L. 618-621〕

ここには明らかにジャクソンら「聖職者」の一行を、俗物視しているミューアの見方が表されていると言つてよいだろう。

また別のところには、「博士」という呼称でジャクソンを指し、彼が先住民のトーテムポールを持ち帰ろうとしている様子が記されている。チルクヤット族の住む地域への航行を取り止め、ランゲル島に戻つて来た一行は、そのまま帰島せず、少し南下して、ステイキーン地方の古い廃墟となつた集落を訪れることにした。案内のインディアンによると、この集落は、見捨てられてから「60年から70年」ほどたっているとされるが〔Muir 1915, L. 736〕、いたるところに往時の繁栄を物語る遺物が散見されるのであつた。ミューアが集落の様子を記録していると、「北の方から何かを切る音がし、続いて立木が倒れるようなドスンと重たい音が響いて来た」〔Muir 1915, L. 769〕。ミューアが行つて見ると、それはジャクソンが蒸気船の船員を使って、その集落に見られたものの中でも「最も興味深いトーテムポールを切り倒させ、その主要部分——3フィート3インチほどある女性の胸像——を切り取らせて、蒸気船に運び込ませようとしているところだつた」〔Muir 1915, L. 771〕。ジャクソンは、「それを東部に持つて行つて、博物館か何かに飾るために」そうしたことをしているのだろうが、それは正に「瀆聖」*sacrilege*とも言うべき所業であり、カダチャン族Kadachanの先住民からは、「もしインディアンが、〔旦那さん一家の〕墓地に行つて、そこを掘り返し、先祖代々伝わつて来た墓石を持つて行つたら、旦那さんはどんな気持ちかね?」と言われる始末だつた、とミューアは記している〔Muir 1915, L. 774-775〕。

言うまでもなくこれらの箇所には、ジャクソンに対するミューアの否定的な人物評価が、はっきりと示されていると言つてよいだろう。ヨセミテでの講演会でジャクソンが話した内容の詳細は分からないが、アラスカでの伝道活動の他に、先住民の生活や文化にも話が及んだことは想像に難くない。その内容が単なる観察に基づくものであつたなら、おそらくミューアも関心を持ち、共感を示したことだろう。しかし上記の出来事や、アラスカ以前の伝道活動においても、ジャクソンが熱心に先住民の文化財を収集してきた事実を考え合わせると、ヨセミテでの講演会でも、彼がアラスカで収集した民具や文化財の話題が取り上げられたことは、容易に想像できる。自然の姿をそのまま「保存」*preservation*することを信条とするミューアにとって、その対象が民具や文化財という人工物であつたとしても、それを勝手に持ち去るような行為は、略奪とも言われるべき所業であり、聖物を盗み去る瀆聖行為に等しいと感ぜられたのではないだろうか。確かにアラスカに関するジャクソンの話は、ミューアのアラスカに対する関心を幾ばくか高めることに寄与したかもしれない。しかしウルフが想像するように、ヨセミテでジャクソンと出会つたことが、ミューアにアラスカ行きを決意させる機縁になつたとは、筆者には考えられないのである。

4. アラスカ行きの経緯

ここで注目したい一通の手紙がある。ミューアは、ダコタ号に乗船しサンフランシスコを離れる直前に、カー夫人に宛てて簡単なメッセージを残している。

さようなら。私は家に帰ります。北海岸の雪と氷と森の中の私の夏に戻ります。明日の正午、ダコタ号に乗り、ヴィクトリアとオリンピアに向かう積りです。そして内陸と沿岸を巡ってみる積りです。アラスカにも行くかもしれません。[Muir 1879a]

ここから明らかなように、この旅行の当初の目的はカナダのブリティッシュ・コロンビアと、ワシントン準州 Washington Territory のオリンピアを訪れることであり、この時点でのアラスカ行きは、「アラスカにも行くかもしれない」[1] may visit Alaska. という程度のことだったのである。この点は、6月初めにマッケイ Mackey という友人からミューアが、ブリティッシュ・コロンビア州知事への紹介状を得ていたことから裏付けられる [Mackey 1879]。すなわち、少なくとも1879年の夏にブリティッシュ・コロンビアを訪れることは、6月9日からヨセミテで行われた「日曜学校大会」よりも前から計画されていたことだったのである¹²。また、6月20日にサンフランシスコでダコタ号に乗船してから、7月14日にアラスカのランゲル島に到着するまでのミューアの足取りをたどってみても、当初の彼の目的がアラスカではなく、ワシントン準州のピュージェット・サウンドからブリティッシュ・コロンビアにかけての北西海岸沿いを巡ることだったことは明白である。

- 6月20日 ダコタ号でサンフランシスコを出港。
- 6月24日 ヴィクトリア B.C. に到着。ボートでポートタウンゼンドやワシントン準州の北部海岸を巡る。
- 6月25日 ポートタウンゼンドからシアトルに移動。シアトルでゼファー *Zephyr* 号に乗船し、タコマ、ステイラクームをへてオリンピアに到着。
- 6月26日 シアトルに戻り、ダコタ号に乗船してヴィクトリアに向かう。
- 6月27日 ヴィクトリアに到着。
- 6月29日 ヴィクトリアでウィルソン・ハント *Wilson G. Hunt* 号に乗船し、ナナイモをへてニュー・ウェストミンスターに向かう。
- 6月30日 ニュー・ウェストミンスターに到着。
- 7月2日 フレーザー川沿いのエールに到着。ヴィクトリアとシアトルをへてポートランドに向かう。
- 7月9日 ポートランドでカリフォルニア号に乗船。船上でルイとルイの両親に宛てて手紙を書く¹³。

7月10日 ヴィクトリアからルイに手紙を送る。

7月14日 フォート・ランゲル (ランゲル島) に到着。

[Engberg, Merrell 1993, 103-4]

ポートランドを出航したばかりの7月10日付の日記を見ると、コロンビア河畔の地形や植生に関する記述が主であり、最後にヴィクトリアへと向かうことが記されているが、アラスカに関する記述は見当たらない [Muir 1979, 246-247]。しかし、日付は明確ではないが、ヴィクトリアを通過してから書かれたと思われる日記中には、「アラスカへと向かう我々の旅が正に始まった」という記述がある [Muir 1979, 248]。ただしこれに続く部分には、アラスカ沿岸の景観がいかに美しいかの叙述と、その景観を作り上げた水河の働きに関する考察が展開されるばかりで、いつから、どのような経緯でミューアがアラスカ行きを決心したのかの記述は見当たらない。

しかしこの点に関する決定的な消息を、我々は、ミューアが7月9日にカリフォルニア号の船上でルイと彼女の両親に宛てた手紙から得ることができる。ミューアはこの手紙の中で、「私はアラスカに向かっています。沿岸全体の状況を見るために、シトカまで行くと共に、安全に〔探索できる〕良い機会に恵まれれば、内陸の様子も見に行くつもりです」と記している [Muir 1879c, 1]。これはミューアが6月20日にサンフランシスコを発ってから、アラスカ行きを明確に示した初めての記録である。しかも「シトカまで行く」や「内陸も見たい」とするなど、内容が具体的である。またこの手紙の中には、「北の地に、おそらく1カ月か2カ月いることになるでしょう」という記述も見られる [Muir 1879c, 1]。ミューアは7月14日にアラスカのフォート・ランゲルに到着し、ここを起点として12月末までアラスカに滞在することになるが、7月9日にアラスカ行きの船に乗った時点で、既に長期間のアラスカ滞在を決めていたことが、この記述から分かる。

さらにこの手紙には、ポート・タウンSEND Port Townsendでフーパー Hooper 大佐という人物と出会い¹⁴、彼が指揮する密輸監視艇 Revenue Cutter でアラスカに行くことを誘われたが、彼の出航命令が発せられるまで、1カ月かかるか、2カ月かかるか分からなかったため、残念ながら、より多くの費用をかけ、カリフォルニア号でアラスカに行くことにした、という趣旨の記述も見られる [Muir 1879c, 2]。加えて、同じ手紙の中でミューアは、「ヨセミテでアラスカに関する講演を行った伝道師のシェルダン・ジャクソンが、我々と〔同じ船でアラスカに〕行くことになっている」とも記している [Muir 1879c, 2]。これらの記述から見る限り、ミューアはジャクソンから誘われたり、ヨセミテでのジャクソンの講演に強い影響を受けたことによって、アラスカ行きを決意したわけではなく、ミューアとジャクソンが同じ船でアラスカに向かったのは、単なる偶然だったことがうかがわれる。さらにアラスカ探検のミューアの意志は、6月20日にサンフランシスコを出航する時点では、まだ確定的なものではなかったが、ワシントン準州の沿岸やカナダの南西部沿岸を旅する中で、徐々に固まって行き、6月30日前後のニュー・ウェストミンスター滞在中に、明確なものになったと推測することが、様々な資料から見て、最も自然な解釈ではないかと筆者には思われる。

以上の考察から、従来のミューア研究ではほぼ定説のように見なされてきた、彼をアラスカ探検へ

と誘った契機に関するウルフの説は、誤りであるということが明確になったと言えるだろう¹⁵。

5. 科学と文学の融合

物語としての『アラスカの旅』の中には、ヤング牧師 Samuel Hall Young (1847-1927) と氷河を見渡す峰に登ろうとした際に、ヤングが滑落して両腕に大怪我をおっしまい、それをミュアが救助する場面や [Muir 1915, L. 522-573], 1880年のアラスカ探検でミュアと同行した、小犬のスティキーン Stickeen との鬼気迫る冒険譚など [Muir 1915, L. 2490-2611], ミュアのアラスカ紀行に関する研究では、しばしば取り上げられる場面があるが、本稿では特に、アラスカ先住民の生活や宗教について記された部分に着目し、そこに見られる彼の学問観や文学観について考察してみることしたい。

『アラスカの旅』は、サンフランシスコから出航し、アラスカのランゲル島に到着するまでのピュージェット・サウンドやブリティッシュ・コロンビア沿岸の地質学的特性や植生に関する博物学的記述から始まって、ミュアが訪れたアラスカ各地の自然環境に関する特性を、無味乾燥なデータとして記述するのではなく、科学的な正確さを保ちながらも、詩情豊かな筆致によって描いている。こうした叙述のスタイルは彼の全ての作品に共通する特徴であり、ミュア・ネイチャーライティングが持つ魅力の源である。しかし『アラスカの旅』には、こうした自然の詩的描写に加えて、彼の他の作品にはあまり見られない、アラスカ先住民の生活や文化・宗教に関する民俗学的な記述も随所に見られる。この点が、他の作品に比して、この作品を一段と際立たせる要因になっているとも言えよう。

さきにジャクソンに対するミュアの評価について論じた際、ミュアとジャクソンら宣教師たちが、スティキーン地方の廃墟となった集落を訪れた時のことについて触れた。この時のことに関しては、『アラスカの旅』における記述と共に [Muir 1915, L. 724-776], その基となった当時の記録が存在している [Muir 1979, 270-272]。これらを比較して見ると、両者の間には、単なる文章表現の違いを超えて、興味深い差異のあることが分かる。以下に挙げるのは、集落の様子を伝える冒頭部分の記述である。

— 当時の記録から

ランゲル島にて、

〔フォート〕ランゲルから14マイル、

7月末

スティキーン族の古い集落の廃墟。外側へと広がった土地の一部が、湾へと少し傾斜している。長さ200ヤード、幅75ヤード。前方には、よく生い茂った草の一行あり。後方には、樹高60フィートから70フィートのトウヒやツガの林。恐らく集落が見捨てられてから成長したものと思われる。〔壊れた〕家屋のおびただしい数の材木が、いたるところに散乱し、のび放題の植物が生い茂っている。雑草、シダ類、古びた灌木、イラクサ、ラズベリー、ドクゼリ等々。他方、浜辺では漂礫が、幾すじかの列をなして積み重なり、満潮時には水面下に沈む〔と思われる〕が、それ

はインディアン達が、漁や戦い、そしてたわいない冒険のための行き来に、彼らのカヌーを押しで行った幾つかの通り道を示している。[Muir 1979, 270]

— 『アラスカの旅』

その古い集落は、海へと向かってゆるやかに傾斜する、長さ200ヤード、幅50ヤードほどある末広りの地形の上にあった。前方は砂利の浜と背の高い草が縞模様をなし、背後には暗い森があった。島々の浮かぶ海を見渡す景色は魅力的で、心地のよいところだった。我われが到着した時、潮は引いていて、浜辺に幾つもの漂礫の露出しているのが目についた。それらは氷河期の終わりごろ、溶けだした氷によって運ばれて来た花崗岩の迷子石だ。漂礫は、海岸線に対して直角の列を幾つか作るように積み重なり、集落のカヌーが通る道の外縁をなしていた。[Muir 1915, L. 729-733]

両者を見比べてまず気づくのは、集落のあった土地の広さが、当時の記録では「長さ200ヤード、幅75ヤード」となっているのに対し、『アラスカの旅』では「長さ200ヤード、幅50ヤード」となっている点かもしれない。しかし、この点は単純な転記ミスだろう。筆者が特に注目したいのは、記録の中では、集落の背後にある森の樹種や、廃墟となった土地に繁茂する雑草の種類が記述されているのに対し、『アラスカの旅』では、これらが省略されている点である¹⁶。『アラスカの旅』では、上記の部分に続いて、この集落に放置された建物やトーテムポールなどの遺物に関する詳細な記述が展開されている。私見では、ミューアは、先住民の遺物に関する記述を際立たせる目的で、敢えてこの場所の自然環境に関する記述を、必要最低限にとどめたのではないかと思われる。

そして取り残されたトーテムポールの様子を、ミューアは『アラスカの旅』の中で次のように記している。

この場所に存在するものの中で最も目につくものは、彫刻が施されたトーテムポールだ。最も簡素なものでも、高さ15～20フィート、直径18インチほどの滑らかに削り込まれた柱の上部に、熊やイルカ、鷲やカラスなどの動物の彫像が、実物大か、またはそれ以上の大きさに彫り込まれている。これらは、それぞれ一族のトーテムであり、一族が所有する住居の前に立てられていた。

他にも、男や女の実物大か、またはそれ以上の大きさの彫像が施されたものがあった。こうした彫像はたいてい座した姿をしており、故人を模したものなのだと言われる。柱の中には空洞が作りこまれていて、そこには故人の遺灰が安置されているのだった。最も大きなものは30～40フィートの高さで、最上部から根もとまで、人間や動物の象徴的な像が、手足を奇妙なしかたで二つ折りにしたり、折り込んだりした姿で、上下に積み重なるようにして彫り込まれていた。また特に威風堂々たるものは、歴史的な人物にかかわる出来事を記念するものだと言われるが、一族の誇りを顕示することこそが本来の目的だったのではないかと思われた。

いずれの彫像も、程度の差こそあれ荒々しく、中には概して奇怪なものもあったが、その表現

において貧弱さや不明瞭さのようなものを持つものは一つもなかった。それどころか、いずれの彫像も厳粛な力と決意を湛えていた。また、その意匠に見られる子どもじみた大胆さは、それらの制作において発揮された雄々しい力強さと結びつき、誠に見事なものであった。[Muir 1915, L. 747-756]

こうしたミューアの記述に見られる特徴を、より鮮明に際立たせるために、同時代に記録されたトーテムポールに関する他の記述と比較してみることにしたい。幸運なことに、シェルダン・ジャクソン自身がアラスカでの伝道活動とともに、アラスカの自然環境から原住民の生活や習俗、社会形態の細部に至るまで記した著書『アラスカと北太平洋沿岸の伝道活動』*Alaska, and missions on the north Pacific coast*, 1880がある。この中に、ミューアと一緒に訪れた廃墟の集落か、またはこれと類似した集落と思われるところに立っていたトーテムポールに関して記した一節がある。

彼らの主要な建物の前や墓所のあたりに、時おり、彫刻が施された巨大な材木が立っていることがある。フィラデルフィア万国博覧会 Centennial Exhibition を訪れたことのある方々は、そうした円柱を思い起こすことだろう。

一族の歴史というものがある。子どもは通常、母親のシンボル *totem* を受け継いでいる¹⁷。例えば、一本の柱の根もとに鯨が彫られていたとしよう。その上にカラス、狼、鷲が彫られていると、それは、現在の家の所有者の曾祖父の母が鯨の一族に属し、祖父はカラスの一族に属し、父は狼の一族に属して、彼自身は鷲の一族に属していることを意味している。こうした紋章には直径2~5フィート、高さ60フィート以上のものもしばしばあり、時には献納式に付随する贈り物や饗宴を含めて、1,000ドルから2,000ドルするものもある。家の入口は、正式にはこうした紋章を潜り抜けるように開けられた穿孔であったが、近ごろでは、蝶番の付いた普通のドアを彼らも使うようになっている。スティキーン族の間では、こうした紋章木すなわちトーテムは、たいていドアの片方の側に移動させられている。[Jackson 1880, 81-82]

さすがにこれまでの長い伝道活動の中で、様々な先住民の民具や遺物を収集してきただけあって、トーテムポールに刻まれた象徴の意味に関するジャクソンの説明は明解である。ただし彼の記述には、トーテムポールを制作した先住民の技術や意匠に関する驚きや敬意のようなものは表されていない。しかし、先住民は教化の対象であり、彼らの生活様式や制作物など、未開の習俗に過ぎないと見る宣教師の目からすれば、それは当然のことかもしれない。ただし、このような見方が、はたして先住民の持つ文化や宗教に対する適切な評価であると言い得るか否かは、また別の問題である。一方でミューアの見方はジャクソンとは対照的で、先住民の技術や生活様式に対する敬意と驚きで満ちている。また彼らの宗教に対してもミューアの見方は中立的で、偏見がない。トーテムポールに空洞が作りこまれ、そこに故人の遺灰が安置されているということは、スティキーン族が火葬を行っていたことを意味している。一般に、キリスト教は死者の復活を信じる宗教であり、復活するためには身体が必要な

ので、火葬は嫌われる。そのためジャクソンも、同書においてアラスカ先住民の火葬を扱った部分では、『北米民族学』*North American Ethnology*から、「人間が想像し得る限りで最も忌まわしく、凄まじい情景」[Jackson 1880, 92]として火葬の様子を紹介している部分を引用し、「文明人」から見て、火葬が「極めて不気味で、おぞましいもの」[Jackson 1880, 93]であるという印象を与えようとしている¹⁸。

ミューアがジャクソンらとともに、廃墟となった集落を訪れる以前に、彼自身がアラスカ先住民の火葬を実際に見たことはなかつただろう。しかし晩年、『アラスカの旅』の原稿をまとめる時までには、何度も彼はアラスカを訪れており、その間に先住民が行う火葬を目にしたことはあつたはずである。しかしミューアは、あえて「文明人」が「おぞましい」と感じるようなしかたで、彼らの火葬の風習を記述することはなかつた。このようなミューアの姿勢には、明らかにアラスカ先住民の宗教や文化を尊重し、「文明人」の目というフィルターを通してそれらを記述することを避けようとする、彼の意志が示されていると言ってよいだろう。

さらに、このステイキーン族の廃墟となった集落をめぐるには、もう一つ注目すべき出来事がある。さきに、ジャクソンに関するミューアの評価について論じた際、ジャクソンが蒸気船の船員を使って、集落に取り残されたトーテムポールを倒し、女性の胸像部分を切り取らせて、持ち去ろうとしたことを、ミューアが「瀆聖」にも等しい所業だと断じている点について触れたが、ここには、単にジャクソンに対するミューアの人物評価が表されているだけではなく、他民族の文化や社会に関する研究のあり方に関してのミューアの基本的な考え方が、同時に示されているのではないかと筆者は考えている。ミューアは廃墟の様子を、彼の主観的な印象とともに、そこに残された遺物の外観から、制作に使用された技術に至るまで、詳細に記述するよう努めている。すなわちミューアは、今日の用語で言えば、民族学的研究は基本的に、「記述」をもって遂行されるべきもので、文化財や遺物を安易に収集するべきではない、と考えていたのではないかと思われるのである。

既に拙著『アメリカ自然思想の源流』においても論じたように、「自然」に対する人間の関わり方に関するミューアの基本理念は、「保全」conservationではなく「保護」preservationである[柴崎文一2014, 230 ff.]。「保護」とは、自然を利用しつつ共生することではなく、自然をそのままの姿で残そうとする思想である。このような「保護」の理念は、ミューアにとって、「自然」のみならず、民族学的な対象に関しても同様に適合するものであり、従って他民族の文化や社会に関する研究も、言わば暴力的にその対象へと介入する「収集」は忌避されるべき行為であり、対象への介入を最小限に止めた「叙述」によってこそ遂行されるべきであると、彼は考えていたのではないかと思われる。ただしミューアの「叙述」には、対象の客観的記述に止まらず、彼の目からみた主観的描写も含まれている。正にここにこそ、客観的な真理の探究と事実の記述に徹しようとする科学と、主観的な世界観や詩的な自然描写の妙を極めようとする文学の、ミューア独自の仕方による融合の姿が如実に現れているのである。

上記の引用箇所を見ると、トーテムポールに関する客観的な記述に続いて、ミューアは「その意匠に見られる子どもじみた大胆さは、それらの制作において発揮された雄々しい力強さと結びつき、誠

に見事なものであった」と、彼の主観的な印象を添えている。これは、トーテムポールのような文化財に関する叙述にのみ見られる特徴ではなく、山や海、岩や草花などの自然のあらゆる事物に関する叙述でも、常に見られるミューアの特徴である。一方で、自然の事物や文化的事象に関するミューアの叙述が、主観的な描写のみで終わることは決してない。彼の叙述には必ず対象に関する客観的な記述が含まれている。すなわちミューアの描き出す世界は、常に対象の科学的な記述と、主観的な描写が融合した形で表現されているのである。

ただし、ジャクソンが行ったような文化財の収集が、全く無意味なことであるか否かということについては、議論の余地がある。例えば木材で制作されたトーテムポールが、どれほど良質の材料で作られていようと、そのまま野外に放置されていれば、100年とその姿を保つことは難しいだろう。今日、アラスカの先住民のみならず、世界各地の先住民の遺物や民具を、比較的良好な状態で我々が目にするができるのは、かつてそれらの文化財が収集され、博物館などの施設で適切に保存されて来たからに他ならない。ミューアが考えるように、物は、それが本来あるべきところに、あるがままの姿であるべきだ、とすることも一つの見識に相違ないが、放置されれば、朽ち果ててしまうかも知れないものを、適切に保存し、後世に伝えて行くことにも十分な意義があると言うこともできる。そしてこれは、自然の「保護」と「保全」を巡る議論とも、密接に関連する問題でもあると言える。

先住民の遺物や民具を、たとえ彼らの生活や社会が変化しても、それらがあった場所にそのまま残すべきだとする考えを「保護」の思想につながるものだとすれば、人為によってそれらを収集し、人類共通の遺産として博物館などに保存しようとするのは、「保全」の思想につながる考え方と見なすことができよう。自然の「保護」に徹すれば、人間とのかかわりを徹底して排除することになる。それは、人間が自然から直接得る利益が、限りなく少なくなることにつながる。これと同様に、先住民の文化財を、そのままの場所に置こうとすれば、先住民の生活が変化するに従って、それらは徐々に失われて行くことになるだろう。一方、自然と共存するために、積極的に人為を働かせ、自然を「保全」することに努めれば、たとえ原生自然を失ったとしても、自然からの恵みを人間が持続的に享受し得る可能性がある。これと同様に、先住民の文化財を外部の人間が保存すれば、後世の人々にそれらの文化財を伝えて行くことができる。ただし、保全によって管理された自然は、すでに原生自然ではないのと同様に、博物館は、文化財が本来あるべき場所ではない。しかし、自然の「保全」や文化財の保存に現実的な意味があることも、また事実である。おそらくこの問題に最終的な答えを見出すことは、不可能なのだろう。

ただしミューアは、他の作品でも原生自然の「保護」を強く訴えて来たのと同様に、『アラスカの旅』においても一貫して、先住民の文化財は、本来あるべき場所に置かれるべきだとする姿勢を堅持し、文化財に対する人為の介入を強く拒否する態度を示している。そしてジャクソンが、先住民の遺灰の安置されたトーテムポールを無造作に切り倒し、持ち去ろうとした時、先住民の一人から、「もしインディアンが、〔旦那さん一家の〕墓地に行くと、そこを掘り返し、先祖代々伝わって来た墓石を持って行ったら、旦那さんはどんな気持ちかね？」[Muir 1915, 774-775]、とたしなめられたことが如実に示しているように、本来の所有者である先住民の感情や文化を全く尊重することなく、自己の一

方的な利益や思想の立場から、先住民の文化財を収集するような所業は許されるものではない、ということも明らかであろう。

『アラスカの旅』は、ミューアのアラスカ探検が紀行文として記された文学作品である。しかしそれと共に、本節でこれまで見て来たようにこの作品には、民族学的な研究のあり方を考えさせる重要な視点も示唆されている。この意味から『アラスカの旅』は、彼の他の作品とは一歩違った仕方で、彼の科学と文学の融合の試みが示されている作品でもある、とすることができるのである。

謝辞

本研究は明治大学人文科学研究所個人研究第2種(2015-2016)及び科研費15K02357の助成を受けた成果の一部である。

参考文献

- Badè, Frederic William. "Preface." *Travels in Alaska*, John Muir, L. 7-41. Boston: Mifflin (Kindle Edition), 1915.
- Carlton, Rosemary. "Sheldon Jackson: Plunderer or Preserver?" 2007 Clan Conference, Sharing Our Knowledge: A Conference of Tlingit Tribes and Clans. 10 March 2006.
<http://ankn.uaf.edu/ClanConference2/2007/RosemaryCarlton.pdf> [アクセス日: 2017年5月29日].
- Chandonnet, Ann. *Gold Rush Grub: From Turpentine Stew to Hoochinoo*. University of Alaska Press, 2005.
- Craddick, Lee Jordan. *Pandering to Glory: Sheldon Jackson's Path to Alaska*. Thesis, Fairbanks, Alaska: University of Alaska Fairbanks, 2013.
- DeArmond, N. Robert. "BIOGRAPHY: Samuel Hall Young." Alaska State Library Historical Collections. 2014.
http://www.library.alaska.gov/hist/hist_docs/finding_aids/MS203.pdf [アクセス日: 2017年5月29日].
- Engberg, Robert; Merrell, Bruce (ed.). *John Muir: Letters from Alaska*. Fairbanks: University of Alaska Press, 1993.
- Gibson, R. James. "The Sale of Russian America to the United States." *Acta Slavica Iaponica*, Vol. 1, 1983: 15-37.
- Grassick, Mary. *Historic Furnishings Report: Strentzel-Muir House*. Office of Media Development, Harpers Ferry Center, National Park Service, 2006.
- Jackson, Sheldon. *Alaska, and missions on the north Pacific coast*. New York: Dodd, Mead & company, 1880.
- Kimes, William F.; Maymie B. *John Muir: A Reading Bibliography*. Fresno, California: Panorama West Books, 1986.
- Mackey, S. G. "Letter from G. S. Mackey to John Muir, 1879 Jun 2." John Muir Correspondence. 2 June, 1879.
<http://www.oac.cdlib.org/ark:/13030/kt8d5nflrf/?brand=oac4> [アクセス日: 2017年5月30日].
- Muir, John. *John of the Mountains: The Unpublished Journals of John Muir*, 2 edition, ed. by Linnie Marsh. University of Wisconsin Press, 1979.
- . "Letter from John Muir to [Jeanne C.] Carr, 1879 Jun 19." John Muir Correspondence. 19 June, 1879a.
<http://digitalcollections.pacific.edu/cdm/compoundobject/collection/muirletters/id/9741/rec/29> [アクセス日: 2017年5月29日].
- . "Letter from John Muir to [Mr. & Mrs. John] Bidwell, 1879 Jun 19." John Muir Correspondence. 19 June, 1879b.
<http://www.oac.cdlib.org/ark:/13030/kt3n39r673/?layout=metadata&brand=calisphere> [アクセス日: 2017年5月21日].
- . "Letter from John Muir to [Strentzel Family], 1879 Jul 9." John Muir Correspondence. 9 July, 1879c.
<http://digitalcollections.pacific.edu/cdm/compoundobject/collection/muirletters/id/10951/rec/35> [アクセス

ス日: 2017年5月29日].

———. *Travels in Alaska*. Boston: Mifflin (Kindle Edition), 1915.

Muir, John; Nelson, William Edward; Rosse, C. Irving. *Cruise of the revenue-steamer Corwin in Alaska and the N.W. Arctic Ocean in 1881: notes and memoranda: medical and anthropological, botanical, ornithological*. Washington: Govt. Print. Office, 1883.

Parsons, Randall Marion. "John Muir and the Alaska Book." The John Muir Exhibit Jan. 1916.

http://vault.sierraclub.org/john_muir_exhibit/life/parsons_jm_and_ak_book.aspx [アクセス日: 2017年5月24日].

Pauly, Steve; Patty Pauly. "Louie Strentzel Muir: A Biography by Steve and Patty Pauly." The John Muir Exhibit. 2017.

http://vault.sierraclub.org/john_muir_exhibit/people/louie_muir_bio.aspx [アクセス日: 2017年5月21日].

Snyder, E. Eldon. "The Modern Chautauquas: Some Theoretical Perspectives." *Journal of American Culture*, Vol. 6, Issue 2, 1983: 15-24.

Vincent, Heyl John. "The Pacific Excursion." *The Sunday School Journal for Teachers and Young People*, New Series, Vol. 11, No 9, 1879: 197-200.

Wardle, Grace Addie. *History of the Sunday school movement in the Methodist Episcopal church*. New York: The Methodist Book Concern, 1918.

Wolfe, Marsh Linnie. *Son of the Wilderness: The Life of John Muir*. Madison, Wisconsin: University of Wisconsin Press, 1945.

Worster, Donald. *A Passion for Nature: The Life of John Muir*. Oxford University Press, 2008.

Wrangell Visitor Center. "History of Wrangell." The City and Borough of Wrangell Alaska. 2017.

<http://www.wrangell.com/visitorservices/history-wrangell> [アクセス日: 2017年5月18日].

柴崎文一. アメリカ自然思想の源流——フロントカントリーとバックカントリー. 明治大学出版会, 2014.

森永貴子. イルクーツク商人とキャプタ貿易——帝政ロシアにおけるユーラシア商業. 北海道大学出版会, 2010.

———. ロシアの拡大と毛皮交易——16-19世紀シベリア・北太平洋の商人世界. 彩流社, 2008.

———. 北太平洋世界とアラスカ毛皮交易——ロシア・アメリカ会社の人びと. 東洋書店, 2014.

注

1 ベーデは、1915年に公刊された「アラスカの旅」の序文を執筆している。神学者であり、考古学者でもあったベーデは、シエラ・クラブへの入会を通じてミュアと知り合い、長年に渡ってシエラ・クラブが発行していた研究紀要の編集を担当した人物である。また彼はミュアの死後、*Life and Letters of John Muir*, 1924と題してミュアの伝記を著し、ミュアの著作集*The Writings of John Muir* (全8巻)の編集も行っている。1919年から1922年までは、ル・コンテ Joseph N. LeConteの後を受けて、シエラ・クラブの第3代会長職にも就いている。

2 当時アラスカでは、まだ金を始めとする鉱物資源は確認されていなかった。

3 スワード William H. Seward 議員は、条約の締結に積極的な働きを示した人物である。

4 ミュアがアラスカ探検の拠点としたランゲル島では、1861年に金が発見されていた。[Wrangell Visitor Center 2017]

5 この時の記録は、後にアメリカ政府への報告書 [Muir, Nelson, Rosse 1883] としてまとめられている。

6 ハーヴァード大学の地質学教授であったジョサイア・ホイットニー Josiah Dwight Whitney は、ヨセミテ渓谷が過去に起きた大陥没のような「激変」によって形成されたとする説を提唱し、当時はこれが言わば「定説」のように見なされていた。ホイットニーの「激変説」とミュアの「氷河形成説」の詳細については [柴崎文一 2014, 193-202] を参照のこと。

7 ミュアは1874年9月15日にオークランドのカー夫妻 Jeanne & Ezra Carr の家でルイと初めて出会っている [Pauly 2017]。また、ミュアとカー夫妻との関係については、[柴崎文一 2014, 153, 162-163, 176] を

参照のこと。

- 8 グラシック [Grassick 2006, 20] は、ミュアの乗船した船の名前を、ルイの母の日記からヴィクトリア号 *Victoria* としているが、乗船の前日にミュア自身が友人のビッドウェル夫妻に送った手紙では、ダコタ号 *Dakota* となっている [Muir 1879b]。この手紙によると、ミュアはこの船でまずヴィクトリア *Victoria* を訪れる積りだとしているところから、ルイの母は、目的地の *Victoria* と船名の *Dakota* を取り違えたのではないかと思われる。
- 9 Cf. [Worster 2008, 247]
- 10 Josephus Flavius Cook が正式な名前。
- 11 『アラスカの旅』の中で、単数形で「宣教師」*missionary* という語が使用される場合は、ほとんどがヤング牧師を指している。ヤング牧師は1878年に長老派教会の宣教師としてランゲル島に赴任し、1888年までランゲル島を拠点として、アラスカに長老派の教会を建てることに努力した人物である [DeArmond 2014, 2]。また彼は、ミュアの1879年と1880年のアラスカ探検旅行に同行し、数々の冒険や氷河の発見を伴っている。1915年にはミュアとのアラスカ探検を記した『ジョン・ミュアと過ごしたアラスカの日々』*Alaska Days with John Muir* を出版している。
- 12 エングバーグ [Engberg, Merrell 1993, xxiii] も類似した点を指摘しているが、エングバーグらは、この時点でミュアが「アラスカ」に行くことを明確に意識していたと解釈している。しかし筆者は、この時点でミュアは、アラスカに強い興味を持っていたが、アラスカ行き具体的な計画までは念頭になかったのではないかと考えている。
- 13 [Engberg, Merrell 1993] の年譜には、この手紙に関する記述はない。
- 14 この時出会ったクーパー大佐は、ベーリング海の探査中、1879年7月に行方不明となったジャネット号 *Jeannette* を捜索するため、1881年に派遣された捜索隊の船長 Calvin L. Hooper と同一人物だと思われる。ミュアはクーパーから依頼を受け、1881年のジャネット号の捜索隊に加わっている [Muir, Nelson, Rosse 1883, L. 181]。
- 15 エングバーグとメルレルは、ミュアをアラスカ探検へと向かわせた契機はヨセミテでの「日曜学校大会」でジャクソンの講演に接したことではなく、それ以前に、ミュアも寄稿している *Scribner's Monthly* 誌に「スティキーン川とその氷河」*The Stickeen River and Its Glaciers* というアラスカに関するエッセイがあり、これを読んだことではないかと推測しているが、これを裏付ける資料などは提示されていない [Engberg, Merrell 1993, xxiii]。また彼らは7月9日付のルイ達に宛てたミュアの手紙についても触れていない。
- 16 ただし『アラスカの旅』の上記の一節に続く部分では、「廃墟は長く伸びたイラクサや古びた灌木で覆われていた」[Muir 1915, L. 734] という表現が使われている。
- 17 ジャクソンは“totem”を「シンボル」の意味で使用していると思われる。
- 18 ジャクソン自身が目撃した火葬の様子を記述した部分では、「不気味で、おぞましい」などの表現は使用されていないが、「死体はバラバラにされ、焼かれる」[Jackson 1880, 89] という記述が見られる。これは単に事実を記述したものに過ぎないが、この記述を見た「文明人」は、アラスカ先住民の火葬の風習を、さぞ「おぞましい」と思ったことだろう。